

破れ寺であつた。

内藤新宿の北半里ほど行つたところに、畑が広がっていて、その東に低い丘のような森がある。その森の中に、その破れ寺はあつた。

二十年ほども前に、落雷による火事のため、本堂はきれいに焼け落ちてしまった。

以来、修理もされず、そのまま放つたらかしになつて、住む者はない。

かたちばかりの山門も崩れ、扁額も焼け焦げていて、かつての寺の名もわからぬようになってゐる。

本堂の横に、半焼けの庫裏だけが残っていたのだが、屋根や壁の間から、雨風が入り込んで、柱は半分が倒れ、梁の半分は落ちるか傾くかしている。

壊れた屋根から適当に陽が差し込み、草や花の種も入り込んでくるから、雨が当るあたりには、はこべらや仏の座、野萱草などの春の草が腐った床から伸びているのである。

それでも、雨の当らぬ場所もあるにはある。

その床の上に、ひとりの痩せ細った老人が、背を曲げて座している。

胡座して、見えるのか見えぬのかわからない、黄色く濁った眼を、ぼうつと遠くに向けている。白髪ぼうぼうとして、顔は、皺に埋もれている。

眼球も、口も、その皺の間に沈んでいて、眼などは閉じれば場所もさだかでないのだが、きよ

ろん、とした眼が、その皺の間から見えているのである。

い。ぼろぼろの、黒い道服どうふくのようなものを着ているのだが、そこから覗く手足は、枯れ枝の如く細い。

生す気がない。胡座した脛すねが見えている。この脛も、骨にわずかに皮が被かぶさっているだけのようで、どこにも

ただ、その眼だけが、別種の生き物のように、ぬれぬれと濡ぬれて光っているのである。年齢の見当がつかない。

その老人の右手前方、六尺ほど先の床に、穴があいている。

そこだけ、焼け落ちた屋根の穴から降ってくる雨で、床の板が腐って落ちているのである。

その穴の縁から、ひよこり、と顔を出したものがあつた。

大きな、蟊蛙ひきがえるの頭部であつた。

その蟊蛙の頭と目だまが、きろきろと動き、老人の方に向けられて止まつた。

床の穴の縁に、蟊蛙の手が現われた。

もそり、

ごそり、

と動きながら、蟊蛙は床の上に這はいあがってきた。

その蟊蛙、なんと、女のような赤い衣きぬを身につけていた。

ちやんと帯まで締めていて、しかも二本の足で立っている。

よく見れば、丈一尺ほどの、蟊蛙の人形であつた。

しかし、人形を操る糸も棒も、身体からだのどこにもついていないというのに、どうして動くのか。老人の視界に、その蟪蛙の姿が映っているのかどうか。

老人の視線は、ここではないどこか、虚空こくうの彼方かなたに向かって放たれている。

と――

老人の懐が、もこもこと動き出して、そこから、黒い生き物が這い出てきた。

大きな田鼠たねずみであった。

一匹、二匹、三匹――次々と田鼠は這い出てきて、老人の膝ひざの上に這い下り、そこからさらに床に下りて、蟪蛙に向かって走り寄ってきた。

蟪蛙の前までやってくると、田鼠は二本足で立ちあがり、蟪蛙にぶつかっていった。

なんと、そこで、田鼠と蟪蛙は、四つに組んで相撲すもうを取りはじめたのである。

一匹目の田鼠が投げとばされ、

ぢゅっ、

という鳴き声をあげた。

すると、間を置かずに、次の田鼠が蟪蛙にぶつかっていった。

二番目の田鼠も投げとばされて、声をあげた。

そして、三匹目の田鼠も投げとばされ、

ぢゅっ、

声をあげた。

その時、ようやく、老人の眼が、ぎろん、と動いて蟪蛙を見た。

老人の右手がゆるゆると持ちあがり、その人差し指が、蟄蛙に向けられた。老人の唇が、わずかに動いた。

その瞬間――

ことん、

と、蟄蛙の人形が、その場に倒れて動かなくなった。

老人の眼が、そのまま正面に向けられた。

ざしり、

ざしり、

と、腐りかけた床を踏んで、ふたりの人間が、そこに姿を現わした。

ひとりには、六尺に余る大男で、黄色く染めた木綿の袖なし羽織を着ていた。その黄色の上にならに黒く虎縞の模様を染めている。

頭には浅黄木綿の頭巾をかぶっている。

背に、箱を背負った飴売りの土平であった。

その後ろに続いているのが、白い道服の如きものを身に纏い、その上に白い衣を羽織った男であった。

長く白い髪を束ねて、頭の後ろで、その根元近くを、赤い紐で結んでいる。

背に、二胡を負っている。

右手に杖を突いた、遊斎であった。

土平は、床に転がっている蟄蛙の人形を拾いあげ、

「こりゃあいけねえ、ただの木偶でくになっちまってる……」  
そうつぶやいて、老人を見た。

「こりゃあ、あんた、また動けるようにするには、三日はかかるぜえ——」  
老人は答えない。

土平を見て、

「ふん……」

小さく呼吸を、鼻から洩もらしたただけであった。

土平の後ろから、幽齋が前に出てくると、

「お久しぶりでござります、播磨法師はりまほうしさま——」

そう言って、赤い唇に、白い花のような微笑を浮かべた。

幽齋から播磨法師と呼ばれた老人は、

「人形にんぎょう町の、幽齋か……」

ふつふつと、小さく泥の煮えるような声で言った。

「離魂船りこんぶねの一件以来でござりますね」

「何の用じゃ……」

「お訊たずねしたきことがござりまして——」

「何じゃ？」

言いながら、播磨法師は、鼻をひくひくと動かした。

「匂におうな……」

「酒の用意をしてまいりました」

「ならば、飲んでから、話を聞こうか……」

播磨法師は、赤い舌を出して、べろりべろりと、上下の唇を舐めた。

「用意を——」

幽齋が言うと、土平が背から箱を下ろして、蓋を開け、中から一升ほど入りそうな瓶子と、杯を三つ取り出して、播磨法師の前の床の上に置いた。

遊齋と土平が、置かれた瓶子と杯をはさんで、床の上に座す。

土平が、三つの杯に、酒を注ぎ入れる。

酒の匂いが、ぷうんとあたりに満ちた。

遊齋が、懐から、白い、丸いものを取り出し、

「卵にござります」

播磨法師の杯の横に、その白い丸いものを置いた。

鶏の卵であった。

「おう……」

播磨法師は、ころんと転がりかけた卵を右手で掴み、

「気が利くではないか」

皺を上下ふたつに割って、赤い口を大きく開き、卵をそのまま口の中に入れた。

播磨法師の喉仏が、上下に大きく動く。

どうやら、播磨法師は、卵を割らずに蛇のように丸ごと呑み込んでしまったらしい。

蛇ならば、喉のあたりで、卵が割れるのだが、卵は、割れぬまま、播磨法師の腹におさまってしまつたらしい。

「馳走ちそうになる……」

播磨法師は、酒の入った杯に右手を伸ばし、それを持ちあげて、すぶり、

すぶり、

と、ふた口で干した。

空になった杯に、また、土平が酒を注ぐ。

それをまた、播磨法師はふた口で干してしまつた。

三杯干して、四杯目から、遊齋と土平がようやく杯を手にした。

五杯目を口に運ぶ前、

「用件は何じゃ……」

ようやく、播磨法師が言った。

「近ごろ、江戸を騒がしているできごとについては、お耳に届いてはおりませぬか」  
遊齋が言った。

「はて？」

播磨法師が、首を傾けた。

「さむらい憑つきが出ました——」

「ほう……」

「これについて、何か、お心あたりはござりませぬか」

「何のことかな」

「誰か、犬神法をやった者がおります」

「犬神法とな」

「上野の屋敷で、首のない犬の屍しかた体が、首まで地面に埋められて、見つかりました……」

「――」

「これは、播磨法師どの、あなたさまがおやりになったものではござりませぬか」

「おれは、やっではおらぬ……」

「あなたさまでなくてもよいのです、誰かに犬神法のことを教えたりはいたしませんでしたか……」

ここで、播磨法師は沈黙し、宙で止めていた杯をゆるゆると動かして、中の酒を干した。

杯を床に置き、

「教えたことなら、ある――」

播磨法師は言った。

「誰に？」

遊齋が問うた。

( つづく )